

第 60 回香川大学祭

代表者 末澤 諒 (経済学部経済学科 3 年)

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、今年で第 60 回になる香川大学祭をよりよいものにし、これを通して地域社会への貢献を果たすものです。

2. 実施期間 (実施日)

平成 20 年 10 月 31 日 (前夜祭)

平成 20 年 11 月 1 日～11 月 4 日 (本祭)

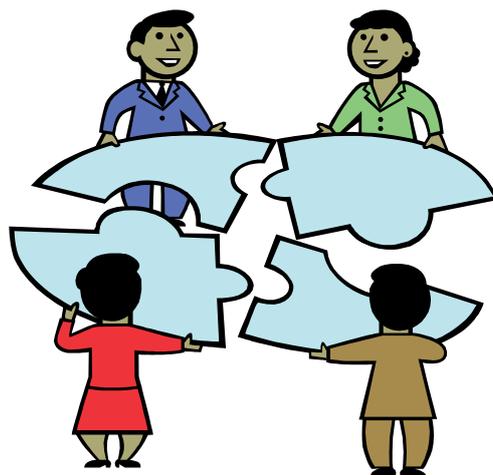
3. 成果の内容及びその分析・評価等

本年度の香川大学祭は第 60 回という節目の年であり、約 100 団体などの参加団体が参加し、60 団体の模擬店やステージでの公演、大学会館や教室での展示など、様々な催しものが行われました。ここ数年の傾向としては、年々参加団体は増加傾向にあります。模擬店の設置場所に関して、改修工事等もあったため、例年とは違い経済学部南側を避け、教育学部グラウンド及び駐輪場に設置しました。懸念されていた雨が降ることもなく、また、この場所が住宅街と隣接していなかったこともあり、例年寄せられていた騒音等の苦情はありませんでした。これは非常に喜ばしいことです。そうした面から、例年の課題を改善出来た面もありました。

また、今回は夢プロジェクト支援の中心とした「香川大学音楽祭」と「さぬきっこ博覧会」を実施しました。従来のような、夢プロジェクト事業費が大学祭の補助金であるというような見方を一新し、地域活性化、地域貢献を目的とした企画に関する支援という理念のもと、これらの企画を実施しました。「香川大学音楽祭」では、高松高校吹奏楽部を招き、教育ステージで公演していただきました。父兄の方々も多数観覧に来てくださり、また、いつもの教育ステージとは一味違った公演を香大生にも楽しんでいただけました。高松高校出身の学生が感慨深く見入っている様子や、高松高等学校を含めた様々な高等学校の生徒が大学祭を楽しんでいる様子を見て、この企画を実施してよかったと感じました。また、「さぬきっこ博覧会」では、栗林小学校、四番町小学校から計 9 点の作品を出展していただき、大学会館に展示しました。これから回を重ねるごとにどちらの企画も発展の余地があると思いました。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

今回、大学祭において、夢プロジェクトに採択していただき、運営したことで、「大学祭」が学生主体のものであることを再確認したとともに、様々な企画によって「楽しませる対象」は学生だけでなく、地域住民を含めた、そこに生きる人々なのだ実感しました。参加団体の学生は大学祭に参加する中でチームワークの大切さを学び、地域社会には香川大学の元気さ、香大生のちからを実感してもらえたと思います。また、大学祭期間中に開催された「ホームカミングデー」の来場者である先輩方には、現在の香大生を見てもらえる良い機会になったと思います。



5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

今回、大学祭を運営させていただいた大学祭実行委員会は、有志による組織であり、今年は4人もの一年生が加わることとなりました。大学祭という大きなプロジェクトを学生主体で運営したことは、大学祭実行委員会のメンバー一人ひとりにとって、かけがえのない経験になりました。学生をまとめることの難しさや、大学、企業、地域住民などといった様々な関係者との関わり方といった、普段の講義では学べない生の体験はこれから私たちが社会で生きていく上でとても貴重な財産になると確信しています。

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

今回の大学祭では、地域住民にアピールする企画として、「香川大学音楽祭」や「さぬきっこ博覧会」などを実施し、一定の集客力はみられたものの、模擬店や展示、その他の催し物への導線が不十分であり、地域住民の方がとりあえずは来たものの、どうすればよいのかわからない、といった状況がみられました。今後はこうした点を改善し、外部からお越しになる方にも大学祭が楽しめるものにしていきたいと思います。また、今年は騒音苦情がなかった点は評価し、これからも迷惑をかけず、楽しみを提供できるよう努めていきます。

今年の夢プロジェクト事業費については、使用用途について、大学との十分な話し合いができず、結果的に事業費を余らせることになってしまいました。今後は何に使うかをより明確にし、執行していきます。また、残金については返還させていただきます。

7. 実施メンバー

代表者	末澤 諒	(経済学部3年)		
構成員	西村 真太郎	(農学部4年)	高野 真一	(法学部1年)
	高原 良明	(経済学部3年)	笹浦 考文	(教育学部2年)
	西森 優真	(教育学部2年)	樽松 涼	(法学部1年)
	栢野 智史	(教育学部1年)	藤川 史菜	(教育学部1年)